

《大林 宣彦》氏

「あなたのいのちと私のいのちを考える～あなたと私は人<sup>ひと</sup>であるから～」

### 余命宣告とガンとの同居

私は、おとしの8月24日から映画の撮影をする予定でしたが、その前日の打合せの2時間前に肺ガン第4ステージ、余命3カ月という宣告を受けました。それから、1年と10カ月が経ちます。今、私は同居人の「ガン君」とよく話をします。「おまえは宿っ子で、俺は宿主なんだ。おまえだって長生きしたいだろう。宿主の俺を大事にして、2人仲良く、あと何十年か生きようじゃないの。」そして、ふと気がつきました。私たちの宿主はこの地球であり、私たちというガン細胞が地球をいじめ過ぎているんだと。私たちがガンと同じように少し利口になって、この地球という宿主に対して我慢をすれば、地球も長生きしてくれるし、私たちも長生きできると思います。

そうということが分かってきて、「ああ、人間というのは理不尽な生き物で、自分の『いのち』ばかり大切に、他人の『いのち』を不幸にしている。」ということに気づきました。その後、私の生活は何も変わっていませんが、ガンを宣告された以降は、蚊が1匹止まっても「俺、ガンに罹って血がうまいかどうか分からないが、ご縁だから、よかったらたらふく飲んでいきなさい。」と言います。また、以前は道端の草なんて平気で踏んづけて歩いていましたが、今は道を歩いていると、草をよけて歩きます。つまり草の「いのち」も私の「いのち」も同じ「いのち」だということに、ガンになったおかげでようやく気がつきました。だから、地球に対しても、地球の上で一緒に暮らしている他の小さな弱い「いのち」に対しても優しい気持ちを覚えることができました。ああ、ガンになってよかった。そんなふうに思っています。

### 敗戦と生き延びたものの責任

日本が戦争に負けた70年前は、「いのち」というものが本当に粗末にされた時代でした。私も子供心に立派な大日本帝国の兵隊になりお国のために死ぬぞと思って生きていました。大人の男の人たちも「おまえも大日本帝国の軍人になって立派に死ねよ。」としか言ってくれません。それなのに、いざ戦争に負けたら、大人の男の人たちは闇米担いで「平和じゃ。平和じゃ。」と言っている。これは何なのかと思いました。この大人たちと一緒に生きてると私たちの未来は真っ暗で何も無いぞとしか思えませんでした。

戦争の中を生き延びてしまったものとして、日本で初めて平和をつくっていかねばならない責務を負ったわけです。しかし、どうやってつくっていいのか分からない。そこで、生きていくことの責任として、私は時代に対して物を言う人間になろうと思いました。映画や演劇など、一人で4役も5役もやったのが私たちの世代です。

### 長岡の花火のフィロソフィー

「この空の花 ―長岡花火物語」は、私がつくった長岡の花火の映画です。長岡の花火には、ほかの花火とはちょっと違うフィロソフィーというか、人間の「思い・哲学」がこもっています。昭和20年8月1日の夜10時30分、B-29が焼夷弾で長岡市を全滅させました。その同じ日、同じ時間に長岡では花火が打ち上がります。そうすると、空襲の記憶がしっかりある人は、花火の日は家に閉じこもって、目を閉じて、耳を塞いで、花火の音が聞こえないようにしています。

映画では、空襲時に背中で子供を背負ったまま亡くしたお婆さんの役を富司純子さんにやってもらいました。紙芝居で戦争中のことを子供たちに語っている場面がありますが、皆、真剣でいい顔で聞いている。というのは、亡くなった子供の記憶で花火でさえ見られないお婆さんが、子供たちに対し戦争について実際に話をしている姿を撮影したものを使っているからです。お婆さんはこう言いました。「私には忘れたいことがいっぱいある。それは戦争です。私の背中で子供が死んでしまったことだっけなかったことにしたい。けれども、もし私が誰にも伝えなかったら、次の世代の人たちがまた同じ悲しみを味わう。私は花火を見ることはできませんが、語り部となって、私が一番忘れたいことを、戦争を知らない子供たちにしっかり伝えることが、生き残った母親の義務・責任だと思うのでやっているんです。」

この方もちょうどその時、ガンで余命半年といわれていましたが、1年しっかりと生きられて、映画ができて上がった後、試写をご覧になりました。「ああ、よかった。これで私は死ねます。未来永遠にこの映画を子供たちに観てもらおうことで、映画が私の遺言を代わりにやってくれることになりました。」と言いました。それがお会いした最後です。それからすぐ亡くなりました。

爆弾はポーンと音がして、下にいる人たちの家を焼き、「いのち」を奪いながら、経済効果を生みます。花火は打ち上げて、ポーンと消えておしまいです。だから、世界はいまだに花火を打ち上げる人より爆弾を落とす人の方が多いわけで、これが戦争が終わらない一番の理由なのです。人間は両方できるが、是非の判断を越えて爆弾ではなく花火をつくる方の人間になってほしい。政治や経済ではなく、映画、表現にこそそれを動かす力があります。だから、映画は風化しないジャーナリスト、人は忘れても映画は忘れない、芸術は忘れないということを、私は語っているわけです。